

メーカー、クリエイター、プロモーターなど  
様々なタイプのプロフェッショナルが協働し  
これまでにない“アイデア”をかたちにした  
注目の共創トピックをご紹介します！

10月号のストーリーテラーは、  
「月曜日が待ち遠しい“Come on Monday”な  
世の中を創る」という想いで(株)カモマンを  
設立した宮原うららさんです。  
連載の初回は、『リーチャー・プログラム』を  
立ち上げるに至ったそもそものきっかけに  
ついて語っていただきます。

こんにちは、カモマンの宮原です。

私は、新卒から5年間、民間企業に勤め、日本橋のまちづくりと新規事業開発を担当していました。老舗商店の女将、建築業者の親方、観光客をもてなすホテルマン。仕事を通して様々な方と出会い、そのたびにイキイキと働く大人のカッコよさに感銘を受けました。

同時に、これだけ多様な生き方が世の中には存在するのに、教師という特定の職種の大人としか出会う機会がなかった学校現場に違和感を覚えるようになりました。子どもの頃にもっと様々な価値観にふれることができれば、もっと社会を身近に感じることができれば、子どもたちは付け焼き刃の進路選択ではなく、自分の人生に真剣に向き合うことができるのではないか。教師の皆様と共に社会全体で次世代を育てる仕組みを構築することで、子どもたちが期待や希望を抱いて飛び込める世の中になるのではないかと。それから私は、教育業界への転身を決意。かつて勤めた塾の事業では都内の私立高校に常駐し、教務担当として生徒や教職員と接しました。そこで強く感じたのは、“目の前の大人が本気で向き合えば、生徒の心に火を灯すことができる”ということです。

将来の夢をたずねた際に「そんなことを自分



に聞いてきた人は初めて」と返ってきた生徒の言葉を、私は今でも鮮明に覚えています。その生徒は基礎学力に課題を抱えていましたが、大好きな鉄道の知識は豊富でした。そこで、専門学校や鉄道関連企業の資料を用意して手渡すと、国語の文章問題はまったく読み進められない彼が、ほんの15分足らずで目を通し、「ここに行きたい」といつてきたのです。

以来、毎日放課後に勉強しにきた彼は、当時危ぶまれていた進級を難なくクリア。こうした生徒が多数いるなかで、大切なのは勉強の先にある“何か”を生徒と一緒に探すこと、その“何か”を探す手伝いは、教員免許の有無に関係なく、生徒と本気で向き合うことができる大人なら誰もが力になれると実感しました。

そしてこの経験が、生徒、教職員、企業人がwin-winの関係になる『リーチャー・プログラム』につながっていくのです。(11月号に続く)

『リーチャー・プログラム』は、学校の課題解決と企業の人材育成を組み合わせた(株)カモマンの独自プログラム。企業人が学校現場に越境し、教職員と協働することで新たな価値創造を目指す。その名称には、社会のLeader(リーダー)が、学校でTeacher(ティーチャー)と協働することで、双方にとってReacher(マジックハンド)のような機能を果たしてほしいという意味が込められている。  
<https://www.camoman.net/>

## episode 01

学校の課題解決 × 企業の人材育成

### 『リーチャー・プログラム』

#### Storyteller

(株)カモマン 代表取締役 /  
NPO法人Teach for Japan

宮原うららさん